

■東北地方太平洋沖地震 気仙沼（3分）-映像解説-

<映像の概要>

海上保安署から見た、津波のあとに起きた沿岸部火災の状況です。

<災害の概要>

- 平成23年（2011年）3月11日（金）、午後2時46分、三陸沖を震源とする東北地方太平洋沖地震が起きました。揺れの強さを示す「震度」はもっとも強かったところで7、地震の大きさを示す「マグニチュード」は9.0となりました。

これは、これまでに日本国内で観測された中で最大です。

この地震は、大津波や余震をともない、東北地方から関東地方にかけて、大規模で深刻な災害をもたらしました。

多くの方が犠牲になり、家や仕事を失い、また漁場や農地が打撃を受けました。

この地震により亡くなった人、行方が分からなくなった人は19,578人（消防庁公式サイト「被害報」より、平成23年11月30日現在）とされていますが、その9割以上は津波によるものです。

津波は北海道から沖縄まで全国の海岸で観測されました。特に岩手県、宮城県、福島県の沿岸部では多くの方が津波にのまれ、建物が流されるというたいへんな被害をもたらしました。

また、福島県双葉郡にある東京電力福島第一原子力発電所が、この地震および津波により大きな被害を受けました。

これにより重大な原子力事故が起き、放射性物質が大気中に放出されたため、被災地をはじめ、広い地域にわたって生活に影響をもたらしています。

さらに、関東・東北地方で地面の液状化現象が発生し、千葉県、東京都といった東京湾沿岸を中心に大きな被害がありました。

いっぽうで防災や、被害を受けたあとの対策の大切さがあらためて見直されました。また、平成7年（1995年）の阪神大震災をきっかけに広まった「災害ボランティア」の活躍や、それを支援する動きが見られました。

- 宮城県気仙沼市では、沿岸部に大きな津波が押し寄せたため、1,028の方が亡くなり、10,958の建物が全壊・半壊するなど、いちじるしい被害がありました（平成23年11月11日現在）。

津波のあとに火災が発生し、炎が海上を移動して沿岸部に燃え移り、昼夜を通して消火・救助活動が行われました。火災は沿岸の鹿折（ししおり）地区で13日間におよび、10万平方キロメートルにわたる広い範囲が全焼しました。

海上火災は、津波で流された油タンクや船から大量の油が流れ出て、引火したことが一因とされています。

<映像の流れ>

映像は以下の流れのとおりです。

見出し	内容
海上で火が燃えている様子 (00:00 ~03:00)	海上で火が燃えている様子を見ることができます。潮流に乗って油も流されるため、画面の右から左へ燃え広がっていく様子がわかります。

撮影日時：平成23年（2011年）3月11日

撮影場所：宮城県気仙沼市、気仙沼海上保安署の気仙沼合同庁舎

撮影者：気仙沼海上保安署